糸魚川に伝わる近代書画文化

岡村　浩

一、

新潟県下には良寛の遺墨資料類を鑑賞出来る文化施設が複数ある。就中、御墓のある長岡市島崎（旧和島村）には、良寛の里美術館が開設され、筆者は毎年秋季特別展の企画監修の任に当たっている（注1）。令和元年は「糸魚川市に伝わる名作品展」（9／11～11／10）と題し、五十点余りの美術品および関連資料を集めた。その概要に触れつつ、展示の意義に言及したい。

二、

人々のくらしから書画掛軸がどんどん遠去かっている。床の間のない住宅、筆文化の難解さ、伝統を受け継ぐ姿勢の欠如。いくつもの理由が挙られる。私は新潟県下各地の特色を、当地が輩出した文人の存在を浮き彫りにすることを通して捉えてきた。二十五年余りの間で、今触れた社会情勢、所蔵者の代替わり、中には災害によるなどして、かつてそこにあったものが失われるケースが顕著である。換言すれば書画古美術の変動は、そのまま各市町村の変容ぶりを映し出しているといってよい。

平成二十八年十二月二十二日、糸魚川大火の第一報に接して不安になる。見慣れた街並み、地名が火元で、とうとう強風により海まで市街地中心を焼き尽くしてしまった。少し戻って、平成二十二年が相馬御風没後六十年の節目に当たることから、市及び御風会の方々と『相馬御風遺墨集』を編集発行した。一年間でたくさんの個人宅・老舗料亭・旅館等を調査し、優に千点以上の作品を資料として掲載出来たのだった（注2）。

それらの中には今回の件で失われたものが少なくない。先ほど述べたようにこの種の古美術品は、あるべきところに所蔵されているので、かつて街並と古美術品は一心同体である。かけがえのない伝統建築と長きにわたる人々のいとなみの歴史と一緒に、書画類も誠に貴重なものを多く失ってしまった。改めて『相馬御風遺墨集』を手にとって口惜しく思う。

一方市民の並々ならぬ復興への思いが形となって、新しい市街地が姿を現わし始めている。令和の新時代そして将来に向けて様々な思索・反省・希望を含む展開である。

被災をまぬがれた古美術品にはどのようなものがあるか、これを書画の面から確かめようと企画したのが本展示である。加えて街並の再生と共に、新たにこの地に集められた書画もあるわけである。それを含め、現時点で見出されたものを対象として準備に着手した。

三、

書画は特殊なものであるから、きっかけ・理由がないと現今集め難い。この点糸魚川では、相馬御風（一八八三～一九五〇）の存在が大きい。市

二〇一九・十・二一　受理

の多彩な文化行事に御風の話題が盛り込まれて、いわば市の顔である。地域の人々のために揮毫した筆跡、地元ファンの購求したもの、御風と交流のあった文士の書画資料が自ずと糸魚川市内に伝わっていた。

御風作は多彩で、作品の内容には幅がある。署名二字の形状から若書きと完成期の作、注目すべき内容が書かれたものを併陳した。

例えば、分水阿部家伝来の良寛書に見る紅葉漉りの和紙を用いた御風詠歌。これなどは国上山調査行で分水方面と縁が生じた副産物であろう。書かれた歌は、「くがみのや山のなだりの草紅葉雨にぬれつつ色のさみしさ」と国上の山道を歩む際の感慨を詠み上げている（軸・14×17・**注3**）。同様の歌は別作「立ちどまりおもへばゆめかうつつかも国上の山の雨に濡れつつ」（軸・14×47　2枚）にもあり、ようやく遺跡巡りを果たせた御風の心情が紙上に滲み出て残る（**注4**）。「はるの野にすみれ摘みつつはちの子を忘れていにし法師今いづこ」（軸・21×18）をはじめ良寛を詠んだ御風らしい作、それも俳画的省略の効いた水墨画を帯同した画讃作も出陳した。歌の下には僅か四筆で良寛愛用の鉢の子を描く。さらにその下には春の野原の象徴で、歌に詠んだ良寛が摘み置いたすみれを添える。晩年の作品。

御風の代表歌といえば「大ぞらを静かにしろき雲はゆく静かにわれも生くべくありけり」である。この歌も二作が会場で見られた。濃淡の差がある水墨で山並みを描いた画讃作は壮年、小色紙の方は晩年作と推定されるもの。小品ながら御風のおひざ元、一の宮天津神社の礼祭にちなむ「ほこりたてぎをんのみこしすぎゆけるかどべにあかきせきりうの花」は、土地の風物を対象とした詠歌の例である。「祇園（祭）」とは、糸魚川一の宮の天津神社から神輿が出て、八坂神社まで一日かけて市内を巡る夏の風物詩。「石榴」とはざくろのこと。

幸い大正十三年、美術館のある島崎での紀行文の一節をしたためた作も見出せた。「大正十三年二月十九日　吹雪を冒して嶋崎村木村氏邸にいたる　良寛和尚遷化（せんげ）の家なり」と詞書をした後、「雪ぐものとざしをふかみいやひこも国上の山も見えわかぬかも」と一首を記す（額・42×27）。

御風の代表著書『大愚良寛』に収める「良寛遺跡巡り」には、大正六年

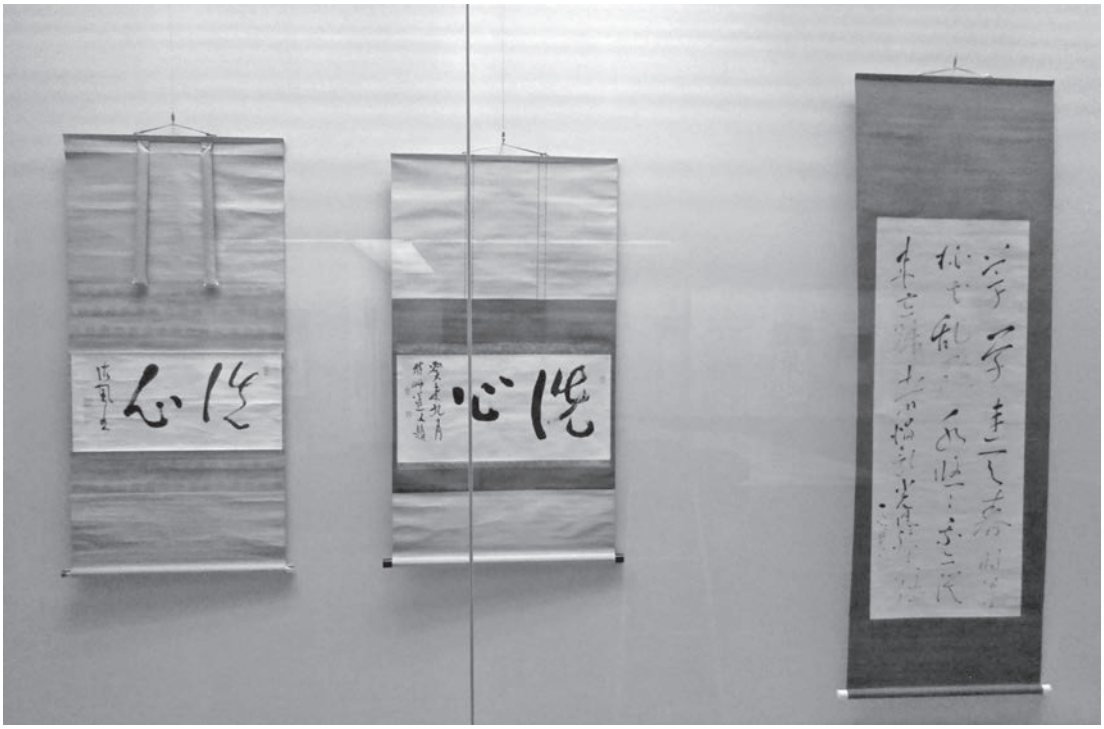

図1　左、御風　中央、八一　右、良寛作

七月九日糸魚川から初の遺跡調査へ出発。柏崎・巻・新潟・岩室・弥彦そして国上山、和島村島崎の木村家、隆泉寺の御墓を詣でる長旅の記録が載る。大正十三年（一九二四）この真冬にも「嶋崎」、美術館のある島崎を訪れていた。その折の詠歌である。

四、

御風の存在のおかげで、糸魚川で良寛を語ることが出来る。糸魚川と良寛との関係は、岡山関西方面での修行から帰省する途次、病を得て糸魚川で一寸休みを取った。そのことを良寛は詩に読み、後年御風筆になる「余将還郷至伊東悲駕波不預寓居于客舎聞雨悽然有作」と題する良寛詩を刻む詩碑が、昭和五年市内直指院に建った。

良寛詩書（軸・127×51）は一点、大きさといい、出来ばえといい、佳品を展示する。

芳草連天春将暮
桃花乱點水悠々我亦従
来忘帰者悩乱光風殊未休　良寛書

長い冬が終わり、さあ春がやって来た。草の緑は天につながる程勢いがある。梅に少し遅れて桃があちらこちらに咲き出し、傍らの川の流れは悠々として気分が洗われる。俗念をもたない私もすっかりこの光景のとりこになって夢中である、の意。

一行目に七字、二行目に十字、三行目に十一字を書く。どんどん文字を詰めてゆくが、全体で一向に文末に苦しさを感じさせない。二行目の「悠々」の詩句通り、まさしく春ののどかさを覚える表現であろう。良寛もこの詩を愛誦したらしく、同詩作を多くみる。

五、

會津八一（一八八一～一九五六）は御風の早大での同級生であった。明治三十五年（一九〇二）東京専門学校入学。両者の交流は御風の没年まで続くことを手紙の往来で確かめた**（注5）**。今回は一点「洗心」（軸・33×66）と「学規」（軸・34×63）を出す。八一作には「癸未」と、十干十二支の組合せで制作年を記す。昭和十八年（一九四三）六十三歳の筆。「洗」字のつくりの点画をみると、筆先の様々な活躍がみえる。「心」の四画も躍り上がる。「秋艸道人」は多用するペンネーム（雅号）の一つ。若い頃は柳の葉の如き細身の薄い書線だったものが、膨らみをみせ充実期を迎えている。六十一歳、銀座鳩居堂で個展を開催した頃からのことである。

なお御風顕彰団体「御風会」では、会の機関誌名を『洗心』と命名している。「洗心」の二字は御風顕彰の旗印で、良寛研究に取り組む真髄を一言でまとめた佳語であるのと、御風がこの二字を書いた作に名品があることに因むのであろう。今回御風にしては珍しい三顆押印のある「洗心」軸（30×62）を出品して、八一作と比べて双方の持ち味を看取出来るようにした。

六、

御風が一目置く存在である安田靫彦。日本画家・良寛研究家（一八八四～一九七八）。とくに歴史人物画の秀作を多く残す。出雲崎良寛記念館蔵品・良寛坐像は傑作。出品作の面長、目じりの上がった切れ長の表情はそれと共通している。画家であるが、大正元年二十八歳で良寛の書に初めて触れ書の美に開眼したという。奥床しい書風は、見せる意識の勝り過ぎる書家の書とは異なる味わいを漂わせる。良寛の逸品を数々集めた人らしい、良寛調の書を手紙等にも看取する。

半身像作上部に「鉢の子をわが忘るれども取る人なし取る人はなし　鉢の子あわれ」と、良寛詠歌を讃に付記した佳品を出品する（軸・124×26）。大事な鉢の子を道ばたに忘れてきたが、誰も盗っていく人はいなかった。そんな鉢の子が益々いとおしく思われることよ、の意。大和古印風の「由支比古」（朱文印）一つをとっても、日本美術全般に及ぶ安田氏の見識の深さがしのばれる。「鉢の子」とは、托鉢でほどこしをうけるための木鉢。良寛遺品として何個か世に伝わっている。靫彦の他、同じ時代の日本画家の中に、良寛遺墨のコレクターが出た。後述する横尾深林人もその一人で

ある。大正十一年に建立された良寛堂は靱彦の設計になるもの。また父御風と合作を行っている三男・晧が靱彦に画業を師事した関係上、御風と靱彦の間柄も互いを気づかいつつ親交を保った。

相馬御風父子合作良寛画讃（軸・38×51）についてだが、安田靱彦の描く良寛像に通じる表情の、厳しくもどこか温か味を漂わせる坐像。僧衣のふくらんだタッチがアクセントとなって人間の大きさ・存在感を醸し出している。作者のサインは右下に「阿伎良」とある。これは今述べた御風の三男・晧（あきら・一九一四～一九七九）。画家・歴史研究家・歌舞伎研究家。NHK大河ドラマ「花神」等時代考証を担当。「仕事大にやれ。父も大に応援しよう」「原稿はどしどし書くべし。雑誌への紹介や、まとめての出版には父はどんなにでも尽力する用意がある」他、父が子の一人立ちを援助する手紙が残る。画家または研究家として立つか、御風は大変心配している。本作の如き合作は、御風にとってうれしいことであっただろう。数点が他にも見られる。左側の讃は父・御風の「良寛さまをおもふ」と題した和歌で、「ももとせのむかしはむかしいまのよにまさばいかにとおもほゆるかも」と記す。もし良寛さまが人心の荒廃した今の世にいらっしゃったならばどのように思われるだろうか、の意。文字が縦にゆるやかにつらなり、併せて左右に行がゆらぎ膨らむ書風は、御風書の完成期の姿。署名の字形からして昭和戦前から二十年過ぎの作と推定。

七、

次は仏教彫刻家の澤田政廣（一八九四～一九八八）である。今日の糸魚川市内では谷村美術館による澤田作の紹介によって、御存知の方が多いであろう。静岡県熱海市生まれの人物がどうして糸魚川と縁を持ったのか、これに関しても御風が登場する。関東大震災で被災後、有能な弟子・石塚裕康を頼って澤田は糸魚川へ。以降御風と邂逅、そこで御風から仏教彫刻に道を開くよう示唆を受ける。やがて光明皇后をモチーフにした「光明仏身」が注目され、文化勲章作家に登りつめる。この過程、第一番に刻し上げた像を澤田が御風に呈上した。糸魚川退住十周年記念も兼ねてのこと。

その作を出陳する（高さ41）。さらにこれを受け取った時の御風からの礼状（大正十四年十一月十八日付）も併陳**（注6）**。澤田のデビューの契機になった特別な意味をもつ作とそれにまつわる資料の同時展覧は、本企画の見どころの一つである。二点は御風没後、別々の道をたどって元のさやに納まっている。

この澤田の書作「佛心」（軸・59×33）は、心安らぐ二字で見飽きない。「心」が見えるので、先述の御風・八一に加え、三者の「心」を見比べる楽しみがある。一字目のにんべんを紙の右寄りに書き始め、中心が右にずれている。二字目の一画目、意表をついて左へ大きく打ち、そして署名を再び右側下方へ入れ、紙面全体のバランスをとる。「佛」の縦画をのばしたが、たいてい字間を空けて余韻を出すところだが、「心」を接近させ二字が重なり合う。一見凡庸にとられる表現だが、見るごとに様々な思いになる。自然であること、これが見飽きない理由で、別の言い方をすると「味がある」といえる。その人が表れているかが、味の有無につながる。それは個性ともいえよう。唯一書家的な意識が働いているように映るのが、署名「廣」字の最終画の、左への返しの部分かと思う。

温和な書とは別人の如き澤田の「不動明王図」は、彩色の施された絵画作（軸・47×68）。この隣りに飾ったのは、棟方志功（一九〇三～一九七五）書「華処」である（軸・110×64）。別人の名の入ったいわゆる「為書き作」は一般に敬遠されやすいが、大人物の名であれば資料として活きる。この志功大字は柳宗悦の信任が篤かった乙訓氏あてのもので、当時民芸の美の普及に努めた人々、柳・棟方・乙訓と横のつながりを想察出来る一作なのである。本作では紙面を筆がたたき墨が飛び散る「華」の縦画、「処」の二画目など紙の下の畳の目が浮かび上がってみえる程、圧力をかけて筆を走らせている。志功の揮毫する姿を撮した写真を見ると、極度の近眼のため紙面に鼻が付く位顔を近付けて書いている。紙の一部しか視界に入っていない状況で、このような規模雄大の運筆に仕上がっている大字作を多く残しているのが不思議な魅力である。

図２　左、政廣宛御風書簡　右、政廣作「聖観音像」

図３　左、志功　右、政廣作

八、

澤田と棟方二者の強烈な個性美に比肩しうるのが、横尾深林人である（一八九八～一九七九・**注7**）。上越生の日本画、詩書を伴う南画家。大正四年十八歳で日本南宗画展五十回記念展での受賞。文展・帝展・日展での活躍に止まらず、海外美術展でも高い評価を受けた人物だが、没後埋没した感が強かった。私は『良寛ゆかりの文人　横尾深林人　相馬御風集』（平成二十一年刊）を編集、新発田と新潟二会場で出版記念展を開催した時、越後の生んだ最後の南画家と位置付けた。また優れた良寛書コレクターであり、御風との親交が深林人の糸魚川疎開の際、合作をするほどに濃厚となった文人像を明らかにした。御風と良寛を通して、この画人も糸魚川との因縁が深いわけである。二作の出品だが、一点「一茶句・名月をとってくれろとなく子かな」は晩年世上から身を引いた頃の、名声にこだわらない自由人の作である（軸・127×33）。まさに句と絵が一体化した情感あふれる作。月夜をぞんざいに六本ハケのように筆を走らせたところ、足元の淡墨、親子の牧歌的な表情などに作家の心情と力量が滲み出る。日本画に詩書（讃）をつけた「南画」を小室翠雲に学んだのだが、絵のみならずその画題に精通すべく、若い頃漢学を修めた教養人である。本作一茶の句の揮毫に特殊な仮名が一部用いられるのは、この時代の人々の教養の一端である。もう一点は別人筆と見あやまる位作風が異なる観音像図で、心経一巻の末尾によると昭和三十九年に、恩人であった越後貰谷村出身の政治家・高橋光威の三十三回忌追慕の念をもって制作したもの（軸・97×26）。作家と代議士との関係から、深林人の「翠田」と号した十代からの中央での華々しい活躍の背景に、様々な人間模様が見え隠れする。

結局言葉はよくないが画壇の権力争いにまき込まれ、松林桂月等に疎んじられ自分の大切にした良寛書の贋作問題で足を引っ張られることになる。世上に深林人作を多く見かけるが、幅があることと、中に渾身の名作があってやはり時代を代表する画家であったと感じる。しかし最早南画は忘れ去られ、文頭に記したような今日、深林人の名作ですら顧慮され難い。この作家を残すために最もふさわしいふるさととは、御風から拡がる文人の範囲に収まる一人として、糸魚川以外に見出せない。糸魚川に深林人の名作がまとまって伝わるのは、作家にとって有難き幸せである。

九、

ふるさとを持つ作家は幸せなのである。生地栃尾でも顕彰される陶芸家・斎藤三郎（一九一三～一九八一）の場合、戦後定住した上越市での評価が高い。その周辺に当たる糸魚川でも、やはり御風と共通する交友録をもった関係から、人気がある。しばしば目にするが、八一が和歌「はつなつのかぜとなりぬとみほとけはをゆびのうれにほのしらすらし」を染付した湯呑み（八一箱書作・高さ9.5）と着彩画「水仙」（軸・39×58）を展示する。八一の歌だが、初夏の風吹く頃になったと、み仏は鋭敏になる小指の先端でほのかにそれを感じておられるらしい、の意。「をゆび」は小指。「ほの」はほのかに、「らし」は推量を表す。この歌は八一歌集『南京新唱』に収める「奈良博物館にて」（大正十年代作）と題す一首。詠歌の対象は大和岡寺蔵の菩薩像であるという。本作は蓋に「秋艸道人和歌湯呑」と、八一自筆箱書がある。また中に「渾斎秋艸道人三十五日供物」との書きつけが入っていた。

埋もれつつある人もいれば、美術館が設けられ脚光を浴びる人もいる。深林人が師・小室翠雲を越えた如き名声を得たことがあったように、斎藤も師・近藤悠三に肉迫し、中には上位にあるとも地元では語られる。共に良師を求め、かつ本人が個性豊かな仕業を残せたことは間違いない。

斎藤は戦時下応召・復員後、兄を頼って上越市に住む。当地戦中疎開者には堀口大学・小田嶽夫・濱谷浩・小杉放庵等の一級文化人がおり、加えて坂口謹一郎・八一・志功などとの親交を得て作陶の幅と深みを出してゆく。湯呑み茶わんだけでも数百種の形状絵付があり、生涯優に万を越す量を作ったが、小さなものでも決して手を抜かずエッセンスがぎっしり詰まっているという。

十、

糸魚川を訪れた文人は多彩だが、一人美食家・陶芸家として名高い独歩の芸術家・北大路魯山人（一八八三～一九五九）を挙げる。昭和十三年に二回、良寛研究のため包丁まで持参して御風を訪問している。出品作は良寛詩「十字街頭乞食了」、扇面を台貼りにした掛軸（19×53）。時代は隔たるが、良寛に心通わせた自由人である共通点を、書の素材とした詩から感じられよう。濃墨を用いた豊潤な表現で屈託がない。

「十字の街頭」で始まるこの詩は、良寛もたくさん書き残している。にぎやかな町内の八幡宮の辺りで「去年の変わった坊さんが今年もまた来ている」と子どもに笑われた、との意。童心に良寛も帰っている。最終行の「又来」の部分は、良寛書の動きをほうふつとする。扇面をこのように軸に仕立てた表具から、旧蔵者の愛玩ぶりがしのばれる。黒田陶々庵箱書。

他、著名な人物では川端康成（一八九九～一九七二）、御風と同時代の高村光太郎（一八八三～一九五六）の書を展示する。川端書は「国境の長いとんねるを抜けると　雪国であった　夜の底が白くなった　昭和四十六年十月二十五日　アンドリウス四周年の日に」額作品（50×66）。「雪国」の題字二字に見る粘着性を帯びた書風が、川端のトレードマークである。この代表作冒頭の一節は依頼に応じて多く揮毫している。本作は為書きで、『川端康成詳細年譜』（二〇一六）に昭和四十七年（一九七二）七十四歳の時、一月六日　銀座「アンドリュース」（加藤晴美ママ）に、赤坂から女の子を連れていく。―とある。このクラブ・アンドリュースの命名も川端が助言したものだという。尚、川端は昭和四十三年（一九六八）ノーベル文学賞を受賞、「美しい日本の私」と題したその記念講演の中で、良寛詠「かたみとて何か残さむ春は花夏ほととぎす秋はもみぢ葉」を引用し、日本らしさの象徴として良寛を世界に紹介した。

光太郎書は、木製色紙掛けに彼が好んで揮毫した「うつくしきもの満つ」を墨書したもの（51×55）。ふたの表に「嶋桐鳴子形色紙掛」と一行、これを作製した職人が題をしたためる。裏面に「うつくしき　光太郎」（印）と署名がある。筆者は帝室技芸員・東京美術学校教授・高村光雲を父にもち、自らも美大彫刻科を卒業。早くにロダンにあこがれ傾倒、欧米遊学をへて新しい造形論、文学評論を身につけた総合型芸術家。本作のようにノミで切りつけるようなタッチの書を多く残す。りんとした響き、高潔な趣は良寛書に通じる。万年筆やペン字の原稿また手紙類も人気で、書の評価が高い。ここに書かれた句は彼の愛誦したもの。昭和二十年四月アトリエを失って、宮沢賢治の縁故で岩手県花巻へ疎開、七年余りの独居自炊生活を続ける。十和田湖畔に建てる裸婦像制作のため再上京。結核のため七十三歳で没す。智恵子との愛、『道程』の詩など文壇に印象深い足跡を留める。色紙を鑑賞するための掛物なのだが、この光太郎書の上に重ねられる色紙とは、無きに等しい。

十一、

元からあるもの、元からのものが呼び水となり新しく集まったもの。それを糸魚川の生んだ文人・相馬御風を主軸に、まず良寛そして八一といった著名な人々、そこに澤田政廣・横尾深林人・斎藤三郎等との交差をさせた点に、本企画の意図がある。これによって今日の糸魚川書画文化の概容が理解されれば幸いである。

自分のこれまでの糸魚川市内での取り組みでは、御風と深林人、もう一人木村秋雨について調査記録をまとめてきた。当時より今日まで続けて多くの方々に資料提供を賜り、中でも原田熊太・冨江和夫両氏に格段の御高配を頂戴している。改めて心より御礼申し上げたい。

注1

筆者の監修によるものを掲示する。

平成二十二年　良寛没後一八〇年・相馬御風没後六十年特別展

「良寛と御風」（9／14～10／31）

平成二十三年　良寛の里美術館　開館二十周年記念特別展

「良寛と會津八一」（9／7～10／31）

平成二十四年
「良寛と亀田鵬斎傑作選」（9／12～11／5）
平成二十五年
「良寛と越佐文人名品展」（9／10～11／4）
平成二十六年
「良寛と幕末三筆名品展」（9／9～11／3）
平成二十七年
「良寛と有願の傑作選」（9／9～11／3）
平成二十八年　開館二十五周年記念　特別展
「良寛とその敬慕者　村山半牧・吉野秀雄展」（9／14～11／6）
平成二十九年　春の特別展
「わびの結晶　晩年の良寛遺墨展」（5／24～7／19）
平成二十九年　秋の特別展
「今良寛と称された人々展」（9／13～11／12）
平成三十年
「良寛顕彰史上の画人　長井雲坪展」（9／12～11／4）

注2
千点の遺墨を分類（形態別）する。
色紙　歌28、絵50、計78
短冊　歌225、絵13、計316
条幅166
茶掛・横幅・扁額109
校歌・原稿19
葉書・封書（巻紙及び便箋）28
団扇・扇面19
自画讃77
合作46
屏風10
巻子4
他40以上

また、次のようにも分類（素材別）出来る。
歌710
漢字102
絵のみ27
良寛詩歌27
一行書26
原稿類38
他

注3
紙に漉き込まれている十九枚のもみぢは、分水町渡部の旧家で良寛と親交をもった阿部家製作と伝わる。同家所蔵良寛詠書作に用いていることでよく知られるもの。つまり江戸時代の葉が下地になっている、世に珍しい御風作。御風もまたこの紅葉漉用紙良寛書を所有していた。表具は三段表具だが、全面昭和初期までに流行した、紙をもみほぐしたように見える「もみ紙」を使用。上部に貼り付けた無地の「押し風帯」と共に全体的に質素・簡古な趣を演出、もみぢの色とも調和している。御風のサインの字形からして昭和ひとけたまでの中年・壮年期の作。

注4
「相馬御風　松田丹陵　扇面貼込」にみる良寛遺跡巡りで五合庵のある国上山を訪れた時の詠歌。雨に濡れた山道を歩みつつ、良寛の姿が見え隠れしたものか。現在の整備された道とはまるで異なる、自然のままに近かった頃のことである。本作は中年期の筆で、軽快に縦に線が流れている。薄く下絵が刷られた扇面形に、放射線上の安定した配字をみせる。下段の老松図には「丹陵画史」と署名がある。早大在学中から演劇・文壇で華々しい活躍をとげた御風の交友は広く、糸魚川に帰住してからも各地の人々との親交は保たれた。画家の中には御風と合作をして名声を高めようとしたものも少なくない。

注5
拙稿「書簡に窺う會津八一と相馬御風の交情」（『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第十二号二〇一〇年所収）を参照されたい。

注6

相馬 御風《澤田政廣宛手紙　額》

御懇情をこめられた御手紙をいただきましてありがたくうれしく存じます。あの御苦心の御作「静なよろこび」を私にくださるとの事、全く夢のやうな気がいたします。「静かなよろこび」といふやうな心境は今の私の最もあこがれてゐる世界でありますから、あの作を拝見して私はひどく動かされたのでした。あの素朴な表現のうちに浸潤してゐる高古な情趣は不思議な力で私のたましひを引きつけたのでした。その作品が今作者その人から私の前に置かれた！それは全く夢のやうな気がするのです。遠慮なくいただきます。そして永く心の糧とさせていただきます。ただ私はこれほどの御高情に対してどれだけのおむくひが出来ようか、それを苦まずにゐられないのです。しかし、今はただ「ありがたう御坐いました」とだけ申上げるより外一歩も出来ることの出来ないのをおゆるしください。取急ぎ右のみ申上げて御礼の言葉といたします。向寒の折柄皆様一層御加養のほど切念致します。　十一月十八日　夕　　相馬御風

澤田寅吉様

池原君へ御申越の石塚君作品頒布会の件、私も至極結構なことだと思ひます。いづれ池原君とも篤と相談の上然るべく尽力致したいのです。

本便は大正十四年十一月十八日付。

政廣の本名が寅吉。御風より十歳余り年下の彫刻家。文化勲章受章。本文にも綴ったが、御風に出会って仏像を作ることを勧められ、一番初めに完成させたのが「静かなよろこび」と題す観音像であった。記念すべき作を政廣は御風退住十周年を祝って贈呈した。その礼状が本便である。

昭和三年糸魚川大火によって御風宅は類焼するが、奇跡的に政廣作「静かなよろこび」は運び出され無事であった。後年政廣はこの作に再会した際、経年のいたみを修繕するため補刀彩色を改めて行う。その結果が出品作である。

元箱裏面の墨書「大正十三年十一月吉日　澤田寅吉作」「昭和五十六年改メ　政廣」によって、制作年が判明する。

御風宛政廣手紙が十四通確認される（糸魚川歴史民俗資料館編『御風宛書簡集Ⅲ』参照）。

注7

横尾深林人については、近年埋没した感があるので特記したい。明治三十一年、新潟県高田市（現上越市）生。南宋画を児玉白洋・小坂芝田・小室翠雲に師事。併せて漢詩を小倉右馬・丸田桜隠・高橋翠邨に学ぶ。大正四年、十八歳にて日本南宗画展五十回記念展で受賞。以降文展・帝国美術院展で受賞出品。昭和初期に企及された海外美術展にも積極的に出品、中央における地位を固める。

戦後も日展に招待出品、昭和三十三年、日本現代絵画ヨーロッパ巡回展に横山大観・梅原龍三郎・棟方志功等と共に選ばれ出品、本人の無上の光栄となる。

昭和四十五年一月四日から十一日まで日本橋三越にて「横尾深林人日本画展」を開催、精力を使い果たす程の大規模個展となる。以降日本棋院機関誌『棋道』表紙を色紙大に描く位で、中央における顕著な活動を停止する。はじめ「南田」と号し、昭和十二年頃に師・翠雲の元を去るまでは「翠田」、同時に昭和の早くから「深林子」そして「深林人」を雅号に用いる。「翠田」と「深林人」作との間には、別手に思う作風の大きな差異がある。この間、日本画壇の有力者・松林桂月との深い確執、良寛への私淑から蒐集にいたるまで、画伯の歩みが画面に反映されているといってよい。

昭和五十四年九月二十八日、八十一歳で世田谷区にて没す。